

開かれた調和としての美的性質

鈴木和馬(東京大学)

本発表は分析美学における美的性質(Aesthetic Property)を主題とする。私たちはふつう、絵画が青いことや山が描かれていることに感動するのではなく、その鮮やかさや壮大さ、繊細さに感動する。この時後者のような語の示す性質が、その識別に趣味や感性を要する美的性質であり、美的経験や判断において重要な役割を果たすとされる。古典的議論に遡れば、まずシブリーは『美的概念』(1959)において、美的性質を色や形、線のような非美的特徴の組み合わせに依存する性質として論じる一方、非美的特徴の列挙のみでは特定の美的質の必要、十分条件いずれも満たせないとする「非条件支配性」を指摘している。また美的性質は、ピアズリーの『美学：批評の哲学の諸問題』(1958/1981)において提起された“部分の特徴やそれらの関係の結果として持つ複合体の性質”である領域的性質の一種として論じられることもある。この範疇には色のような創発的性質や、体の部位の重さの合計のような総量的性質が含まれるが、細かい区分や美的性質の位置について明確な結論はない。

他にも現在まで様々な論脈があるが、本発表の観点から二つの課題を指摘できる。まず一つは、美的性質を特徴づける際にしばしば重視される要素間の“関係”とはいかなるものかという問いである。先述のように、領域的性質一般も何らかの形で要素の関係が関わる。そこから美的性質を峻別するには、非条件支配性や創発性のような推論/還元不可能な関係の複雑さに訴える消極的規定とは異なる説明が求められる。また二つ目は、美的な領域固有の快に関わる問いである。近年の美的経験論では、美的性質それ自体のために注意を向け評価することや、そのあらわれ方を理解することが美的快に繋がるとされる。しかし現状ではそうした評価の基準や、快が単なる知的達成や無関心だけに基づくものではない理由を明示できない。

以上を踏まえ本発表では、領域的性質の一種としての調和——典型的には音の調和や正方形のような、要素の数比関係からなる全体の性質——という観点から、美的性質の調和性を指摘する。まず他の領域的性質との比較を通じて、調和を単なる数比ではなく、例えば四角形という広いクラスからより特殊な正方形を特定するように、要素間の関係それ自体のユニークな特徴を捉えることで対象の特殊性を示す性質として説明する。続けて、美的性質を「開かれた調和」として特徴づける。これは、典型的な調和が音の高さや四つの辺/角度のように限られた要素からなる「閉じた調和」であるのに対して、美的性質はそうした制約無しに対象の色や形、線などあらゆる要素に開かれ、その関係からなる調和であるとするものである。以上から「開かれた調和」概念は美的性質の範囲を適切に包含でき、また対象固有の調和を捉えることが美的な領域固有の快に通ずることを主張する。